

## バシェの音響彫刻プロジェクト

### 2019年度活動報告

#### プロジェクトの目的

バシェの音響彫刻は、ベルナール・バシェ（1917-2015）、フランソワ・バシェ（1920-2014）兄弟によって1950年代に考案された、音の鳴るオブジェである。1970年大阪万博の鉄鋼館の音楽監督であった武満徹氏から、音響彫刻の製作と展示を依頼されたフランソワ・バシェは、来日して17基の音響彫刻を作った。バシェの作品は様々な国に遺されているが、これほどまでに数多くの大型音響彫刻が一度に作られたのは、後にも先にもこのEXPO' 70においてほか例を見ない。しかし万博閉幕後、鉄鋼館は封鎖、音響彫刻はすべて解体され、倉庫に保管されたまま世の中から忘れられていった。

2010年鉄鋼館が「EXPO' 70パビリオン」として再びオープンしたことが、バシェの音響彫刻を永い眠りから解くことになる。オープンに際して、まず「池田フォーン」が、そして2013年には「川上フォーン」と「高木フォーン」が修復・復元された。それから2年後の2015年に「桂フォーン」と「渡辺フォーン」が、本学彫刻棟において修復されたことが、私がバシェの音響彫刻に興味を抱ききっかけとなった。さらに2017年には東京藝大において「勝原フォーン」が修復され、日本で音の出せる状態に復元されたバシェの音響彫刻は6基になった。

以上述べた音響彫刻群は、今年50歳を迎えたことになる。当然、錆びたりゆがんだり、ネジ山が甘くなったりして、メンテナンスを施す必要性が明らかになってきた。またバシェ自身による綿密な設計図が残されていないので、構造の詳細、音響の記録などアーカイブを残す必要性も感じている。

2020年は1970年大阪万博から50周年というメモリアルイヤーで、東京、神奈川、大阪、京都とバシェの音響彫刻が大移動しながら、それをういたコンサートやワークショップを伴う展示が開催される予定である。2019年4月からスタートした本プロジェクトは、主にその2020年の準備期間として活動した。以下、活動項目に分けて報告する。

#### 1. メンテナンス

2015年10月以来本学大学会館ホワイエに展示してある桂フォーンと渡辺フォーンは、コーン（拡声盤）に白錆びが発生したり、演奏のために貼り付けられたテープ跡が多く見受けられたりした。そこで、プロジェクトチームメンバーが2週間に1度ぐらい集まり、錆び取り剤や金属磨きで清浄作業を行なった。



メンテナンス作業

## 2. 録音

10月に二通りの録音を行なった。一つは桂フオーン、渡辺フオーンに、「冬の花」（2015年に音響彫刻の修復指導をするために来日したマルティ・ルイツ氏と、本学彫刻専攻学生との協働によって作られた小型のバシェ・モデル）と、パレット・ソノール（バシェの教育音具）を加え、また時にはヴォーカリストも共演して、即興的に演奏した音楽の収録である。

もう一つはアーカイブとしての録音である。バシェの音響彫刻の音は通常の楽器の音とは違い、複数の倍音が同時に聞こえたり、打つ物によってピッチが異なったりする。今後それらについての音響学的研究の資料になることも踏まえて収録した。

### 3. 国際交流

10月、メキシコ人のバシェ研究者イヴァン・ナヴァレット氏が来日した。大阪のEXPO'70パビリオン内の音響彫刻3基を試奏できるよう手配し、同行した。また本学の音響彫刻2基も試奏してもらった。メキシコにもバシェの音響彫刻作品が遺されており、またパレット・ソノールを用いた音楽教育も実践されているということで、今後ますます交流を深めていきたい。

### 4. 教育

後期に音響彫刻を用いたゼミと特別授業を行なった。

まず作曲特別演習ゼミでは作曲専攻学部1回生3名と指揮専攻修士1回生1名の計4名で、毎週、大学会館ホワイエで音響彫刻を試奏しながら、奏法や記譜について考えた。その成果は2020年11月にギャラリー@KCUAにて開催予定の「バシェ特別企画展」にて発表される予定である。

また10月末のキャリアデザイン演習（音楽学部全専攻生対象）では、音響彫刻のデモンストレーション演奏のほか、パレット・ソノールも交え、ダンサーにも特別参加してもらって、自分で音を発見する体験と、音を用いたコミュニケーションについての実験的な授業を行なった。

バシェの音響彫刻のミニチュア版ともいえるパレット・ソノールを用いた教育については、京都子どもの音楽教室との共同研究課題として、さらに経験を積んでいきたい。

岡田加津子（音楽学部教授）